

豊田市の郷土資料館
だより

No.86

Toyota City Museum
Of
Local History



地域学習
サポーター
活躍中!!



目次

- ・ 活躍しています！地域学習サポーター!!.....2
- ・ 平成25年度特別展準備レポート2
- 「金の的に中てる」～奉納額と熱い弓引き達～.....3
- ・ 埋蔵文化財調査速報 寺部遺跡13A区.....4
- ・ 山田金正氏と町有飛行機・挙母号
～山田金正氏を追悼して～.....5

- ・ 民具調査だよりー13 民具の調査・登録で思うこと.....6
- ・ 足助の町並みでの発見.....7
- ・ 平成25年度博物館実習について.....7
- ・ 文化財シリーズ86 市指定文化財 千手観音立像.....8
- ・ 資料館NEWS.....8

活躍しています!地域学習サポーター!!

ー郷土学習スクールサポートの現場からー

地域学習サポーターとともに学ぶ

平成25年度も小中学校から郷土学習スクールサポートの依頼を受け、郷土資料館や発見館見学、遺跡の見学、出前授業などを実施しています。小中学校からの依頼件数は、公共施設見学や資料貸出も含めると平成24年度では年間150件を超え、市内小学校の83パーセント、中学校の40パーセントが何らかのかたちで活用していることになります。このような「郷土の歴史を学びたい」という声に応えるために、地域学習サポーターの方々が市民ボランティアとして郷土学習スクールサポートを支えています。

平成25年度は、現在38名のメンバーが地域学習サポーターに登録し、郷土資料館や発見館見学、市内の遺跡見学、出前授業をサポートしています。

その活動のようすを紹介します。

遺跡見学をサポート

豊田市指定文化財となっている近代化遺産「^{どうど}百々貯木場」では、小中学生が毎年6～11月にかけて見学に訪れます。一目見ただけでは何の施設かわからない

「貯木場」の遺構を案内するのは、貯木場創設者の親族でもある今井さんです。貯木場の古写真をパネルにして、かつてはいかだを組んで運ばれた木材を積み上げたようすや、多くの人々と物資が集まって、にぎわっ



＜百々貯木場の見学案内＞

た昔のようすを解説します。子どもたちは、現地で関係者の親族から直接話を聞きとり、学ぶことができます。

他にも^{かくれ}香久礼1号墳や^{やはらしや}八柱社古墳、縄文時代の復元住居が見学できる^{みずくみ}曾根遺跡公園、^{しちしゅうじょう}水汲遺跡、^{すみやぐら}七州城の隅櫓でも、各遺跡を担当する地域学習サポーターがわかりやすく



＜七州城隅櫓の見学案内＞

解説します。来年度以降は、新しく国の重要文化財となった旧鈴木家住宅などが残っている足助の町並みを、見学案内ができるようにしていく計画です。そのために、新しい見学プログラムや小中学校の学習の位置付けなどに

ついて、地域学習サポーターとしての研修会を定期的に実施しています。

出前授業をサポート

小学校4年生の社会科「郷土をひらく」の学習で、「^{にしざわしんぞう}西澤真蔵と^{したれ}枝下用水」について教えてほしいという依頼があると、郷土史家でもある鈴木さんが出前授業に赴き、西澤真蔵が中心となってすすめた、枝下用水建設のようすをわかりやすく語り、ていねいに子どもたちの質問に答えます。

小学6年生が江戸時代の学習にさしかかると、内藤^{ないとう}学文公顕彰会会員でもある坂野さんが登場します。七州城図のパネルをもとに、挙母の町のようすを語り伝えたり、火縄銃の使い方なども解説したりします。



＜火縄銃を取り上げた出前授業＞

また、6年生が縄文土器づくりや野焼きに挑戦する時は、陶芸経験の豊富な地域学習サポーターが出前授業に同行し、専門的な知識や技能を生かして活動を支えます。

地域の子どもたちをサポート

藤岡地区では地域学習サポーターの立ち上げが最も早く、平成22年度から活動を開始し、現在は15名が登録して活動に参加しています。主に地区限定で地区の小学校による藤岡民俗資料館の考古資料の展示見学、古い農具や旧山内家住宅（県指定文化財）での昔のくらしの体験学習をサポートします。



＜市場城の見学案内＞



＜旧山内家住宅での古い道具体験＞

小原地区では、地元のガイドボランティアの方々11名が地域学習サポーターとして、古い道具を体験する出前授業や、^{いちばじょう}市場城などの見学案内をします。

小中学校は学習活動の一環として見学や体験を行います。子どもたちが地域学習サポーターとともに学ぶことができる活動をめざして、学習のねらいを明確に示しながら、充実した郷土学習スクールサポートとなるように改善を図っていきます。（西崎 修）

「金の^あ的に中てる」～奉納額と熱い弓引き達～

「金的（キンテキ）」と聞くと、“格闘技の反則技”というイメージを持ってしまう人は少なくないでしょう。豊田市内では、この「金的」に「中」^あると書かれた額が、特に山間地域の神社拝殿や舞台等に掲げられていることを目にする機会が多くあります。

数が多い神社では、100枚近くの「^{きんてきちゅう}金の中」の額が奉納されており、デザイン・サイズも実に多様であるため、時にその迫力に圧倒されることもあります。ではこの「金の中」と書かれた奉納額は一体何なのでしょう。一番大きく書かれた「金の中」以外の文字を観察してみると、「大和流大山鉦九郎門人 鳥居吉三郎」や「日置流印西派杉田和夫門人 上田守」など、何かの武道らしき流派を推測させる文字を見ることができ、年号は明治～昭和初期のものも多く、中には文久や慶応などの幕末のものもあります。何かに「中（あ）てる」武道というと、私は真っ先に「弓道」を思い浮かべます。そうです、この額は弓に関係するものなのです。この奉納額は、お祭りで行われる弓の神事等で、「金的」と言われる直径約6cmの「金色」の「的」に「中」^あてた人だけが神社に奉納できる名誉な額なのです。弓の神事では、「金的」は悪霊の目玉と考えられ、金的を射抜くことで、村の安全や五穀豊穡を祈願したと言われています。

こうしたお祭りの際に行われる弓神事（俗にお祭り弓）で、金的を射抜いた者が奉納した金の中の額は、現在分かっているだけでも市内の約40の神社で掲げられています。こうした弓神事は、豊田市内の金の中奉納額を見る限りでは、江戸時代中期に始まり、明治末～戦前に隆盛を極め、昭和30～40年代に行われなくなったようです。弓が盛んに行われていた昭和初期には、弓引き（弓を引く人）は、秋祭りの時期になると近隣の村々で行われる弓神事に、弓を自転車にくくりつけて巡り、弓を引いて回ったそうです。遠くは静岡県三ヶ日から豊田市四ツ松町まで来る弓引きもいた

そうで、村人がそうした遠方からの参加者を泊め、食事を提供し、大いにもてなしたとされています。現在でも市内で弓神事を行っている神社は、足助八幡宮、熊野神社（大沼町）、黒坂神社（黒坂町）、弘法山御堂（大沼町）があります。

また、市内神社には、神事以外にも金の中の額が奉納されていることがあります。それは、村で行われた様々な祝いの事に開かれた弓の行事で金的を射抜いた人が奉納した金の中の額です。例えば杉本町神明神社では、農村舞台再建を祝して行われた弓の行事で、的を掲げる土盛りである安土^{あづち}に掲げられた12個の金的を射抜いた弓引き12人が連名で奉納する十二金の中奉納額や、上切町白山神社で大正14年（1925）に行われた、村人の銀婚式を祝して行われた弓行事の際の金の中奉納額など、神事の場合だけではなく、様々な生活の場で村を挙げて祝う時にも弓が引かれていたことが分かります。

特別展では、現代よりも弓と人々の生活（祝い）が密接に関わっていたことや、お祭りシーズンには夢中になって弓を引いた弓引き達を紹介し、郷土の弓文化について考える機会になれば幸いです。

（井上 直己）



和合町神明神社の金の中奉納額

埋蔵文化財調査速報

寺部遺跡13A区

調査地点：豊田市寺部町・上野町・千石町

調査期間：平成25年7月22日～平成25年9月30日

調査面積：846㎡

調査概要

寺部遺跡では寺部土地区画整理事業に伴う事前調査を平成20年度から行っています。13A区は平成23年度調査の11B区と平成24年度調査の12C区の西側に位置する区画で、竪穴建物3棟、溝5条、井戸2基、自然流路1条、土坑・ピットなどが見つかりました。13A区では近接する区画の調査結果から、主に中世・近世の遺構が分布すると予想されましたが、古代～近世の遺構が見られたほか、わずかに弥生・古墳時代の遺構が見つかりました。竪穴建物のうち1棟は中世の溝に切られていました(写真1)。溝5条は、山茶碗や古瀬戸などの出土遺物から中世に属するものと考えられます。

ここでは比較的残りの良かった2基の井戸を紹介します。いずれも近世と考えられる井戸です。調査区北寄りに位置する1基は石を組んで井戸側とする構造の井戸で、円礫を多数積んでいます(写真2)。板材や曲物はみられませんでした。調査区の最も南に位置する井戸は、底部に板材を箱形に組んだ井戸枠があり、その上部に石を組んで井戸側としたものです。発掘した時点で板材と石組みともに破壊されていました(写真3)。

これまでの寺部遺跡の調査で見つかった井戸は、範囲確認調査等で2基(近世)・11A区2基(中世)・11B区1基(中世)・12A区5基(不明1基・近世4基)・12B区4基(中世1基・近世3基)・12C区3基(近世)の17基が見つっています。中世の井戸は素掘りのものが多く、1基のみ石組+結桶という作りでした。近世の井戸は12A区の1基を除いていずれも石を積んで井戸側としたものでした。

豊田市内では市域南部の郷上遺跡(渡刈町・鴛鴨町)や今町遺跡(今町)などで多数の井戸が見つっています。北部では古城遺跡(御立町)で4基(中世)、梅坪遺跡(東梅坪町)で2基(中世)が知られています。

寺部遺跡では近世の井戸が多数分布することが分かってきましたが、今後も調査が進展する中でさらに

中世・近世の井戸が見つかることが予想されます。



写真1 古代の竪穴と中世の溝



写真2 近世の井戸の石組み



写真3 近世の井戸の板材

山田金正氏と町有飛行機・挙母号

～山田金正氏を追悼して～

発見館で開催した企画展「われらの飛行機・挙母号
～衣ヶ原飛行場とその時代」の協力者である山田金正
氏がお亡くなりになりました（享年92歳）。追悼の意
を込め、山田金正氏を紹介します。



山田金正氏 熊谷飛行場にて（埼玉県） 昭和19年（1944）
個人提供

元挙母号整備士・山田金正氏（1921～2013）

旧姓矢頭。西加茂郡挙母町下市場（現・豊田市下市場町）生まれ。昭和6年（1931）の衣ヶ原飛行場の地鎮祭での航空ショーを見てパイロットを志し、昭和12～13年（1937～1938）には衣ヶ原飛行場において無償で機体の整備を担当しながら、航空機の勉強をしました。

山田氏が整備士となった昭和12年（1937）は、挙母町民が寄付金を出し合って購入した町有飛行機・挙母号（アプロ504K）が誕生した年にあたります。山田氏は、機体整備の御礼に挙母号のパイロット小泉喜久男飛行士に挙母号に乗せてもらったそうです。

昭和14年（1939）名古屋飛行学校を卒業し、2等飛行操縦士、1等航空士の資格を取りました。昭和16年（1941）頃、小幡ヶ原飛行場で挙母号二号機となる三式陸上初歩練習機二号の分解・組立を行い、耐空検査を通しました。その後、グライダー1級滑空士、2級教士の資格を取り、愛知県知事が支部長を務める大日本飛行協会愛知支部「航空青少年隊」教官となりました。その後、太平洋戦争に出征し、復員後は、挙母町、

挙母市、豊田市職員として働きました。78歳まで航空免許を更新し続けました。

山田氏は、昭和18年（1943）2月14日、グライダー「巴ハの一」で生駒山（奈良県）から大阪平野上空を飛び、盾津飛行場（現・東大阪市）まで9時間56分の飛行記録を持っています。この記録は、当時の日本新記録だったそうです。

出会い～企画展の誕生

山田氏と発見館の出会いは平成20年度の企画展「尾三バス、走る！」に遡ります。発見館内で放映していた飛行機の映像を見て、写っていた飛行場が小幡ヶ原飛行場であることや、飛行機の機種名を次々に口にする山田氏に、「この人すごい！」と、当時の担当者はとても驚いたそうです。この出会いをきっかけに、飛行機の部品（サルムソン2A2のストラット）の寄贈やその後の企画展を通して発見館との交流が続きました。

平成23年（2011）、航空史研究家の丹羽八十氏が山田氏からの聞き取り調査をもとに挙母号の復元図を描いたことが、中日新聞に掲載されました。この記事を見たラジコン飛行機愛好家の森正男氏が丹羽氏に連絡をとり、復元図から1/5.6の模型を製作しました。

「もう一度、挙母号が豊田の空を飛ぶ姿が見たい！」

挙母号模型製作、挙母号の企画展構想、すべては山田氏の思いを受けて、生まれました。

ラジコン・挙母号フライト成功

平成25年（2013）9月21日、猿投棒の手ふれあい広場において挙母号1/5.6ラジコン模型のフライトイベントが行われ、太田稔彦市長をはじめ50～60人が挙母号の雄姿を見守りました。入院中だった山田氏は、ご家族から挙母号のフライト成功の報告を聞き、一安心されたのかその後意識がなくなり、23日に旅立たれたそうです。

「金正さん。飛行機について知識がない私に根気よく話してくださいましたね。今も、挙母号について生き活きと語る金正さんの姿が思い出されます。本当にありがとうございました。」（小西 恭子）

民具の調査・登録で思うこと

はじめに

この民具調査だよりも過去12回の連載を終え、新たに4年目を迎えることとなりました。そこで一度原点に立返り、“民具”について、その成り立ちと民具研究の置かれている現状とを、筆者自身の反省も踏まえて述べてみたいと思います。

民具という言葉

民具あるいは民具学と称される考え方が、初めてわが国で唱えられたのは、渋沢敬三の主宰したアチック・ミュージアム、“屋根裏博物館”^{しゅうしゅう}でのことです。渋沢は各地の民俗品蒐集の急務を訴え、民俗品による科学的実証の研究の必要性を説いて、『民具蒐集調査報告』を定義しました。それによると、民具は「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」と記されています。また、その項目には、衣食住・生業・通信運搬・団体生活・儀礼・信仰と年中行事・娯楽遊戯・玩具と縁起物などという言葉が並べられています。さらに、「これらの用具にのみ限定されるものではなく、それは生活文化の全分野にわたって、一般の人々がその必要性から制作・使用してきた伝承的な器具・造形物の一切を包含しているのである」との補足があります。

私たちは、日常の暮らしをより豊かに、有効的にするために知恵を働かせ用具を造り、使い続けてきました。一人の知恵者が作り出した用具が、始めは小さな生活共同体の中で認知され、それが周辺地域に広まっていく。その過程の中でさらに創意工夫と製作の技術が磨かれ、現在の私たちの日常生活を豊かにしてくれています。

■登録名称が解らない資料



写真-A



写真-Aの拡大写真
新聞紙で包んだ皿が糸枠に荒縄で縛ってあります。

“紘け台”として登録しましたが、“撚綿軸”かも知れません。

調査・登録の過程で

豊田市内各所での、約2万点におよぶ民具の調査・登録を終えましたが、その過程の中で取り扱った資料十数点の登録名称を確定できずにいます。名前も使用方も解らない…。そんな時は、先学に尋ねたり、資料と関連があると思われる日本国内各地の資料館へ問い合わせの手紙を出したり、事典や『和漢三才圖繪』^{わかんさんさいずえ}などの資料にあたったりしますが、それでも答えをみつけることのできない物が悔しいかな残ってしまいます。私自身がもっと勉強をしないとはいけませんが、この数年心配でならない事があります。ひとつの例をあげますと、不明な資料に関する問い合わせの手紙を、県外のある資料館に送ったところ、若い学芸員さんには答えがみつけれなかったようで、「私は去年この部署の担当になったので詳しい事は解りませんのでエ～」と、そして「ネットのコレコレで検索してみてください」という返事をもらいました。近隣の資料館にお邪魔して学芸員の方にお話を伺うにつけ、民具の調査研究は危機的な状況にあると言わざるを得ません。

民具研究の今後は

40年前に民具の研究が大切だという気運が高まり、日本各地で、地域の民具研究会が発足しましたが、当時の若手であった人達は定年を迎え現場から離れて行き、また当時の先生方は話をお聞きする事のできない所へ行ってしまうわれました…。この先、どのような方法で民具を含む『物質文化』を捉えて行けば良いものなのか、悩ましい問題です。民具も工芸も民藝をも包含した新たな研究のフィールドを開拓しなしなければならぬ時期に来ているかも知れません。

(東海民具学会 岡本大三郎)



写真-B



写-Bの拡大写真

足助の町並みでの発見

豊田市足助町といえば、紅葉が美しい香嵐溪^{こうらんけい}が有名ですが、その昔は尾張・三河と信州を結ぶ旧伊那街道の要地として栄えた商家町で、今も歴史的な町並みが残っています。昭和50年代から保存の取り組みを進め、守り育んできた町並みは、平成23年（2011）に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

ここで紹介するのは、足助の町並みのほぼ中央あたりに位置する田口家の主屋についている「モノ」です。

田口家は、屋号「萬屋^{よろずや}」といい、お茶や油類などの様々な品物を扱っていた商家です。

田口家主屋は、140年以上前に建築されたと言われており、棧瓦葺きの2階建てで間口が6間ある大きな町家です。軒裏や外壁は漆喰で塗込められ、虫籠窓^{むしこまど}が特徴的な立派な建物です。

その重厚な建物の足元に目を遣^やると、ひっそりと壁に金具が付いています。これは、駒留め^{こまどめ}とか駒繋ぎ^{こまつな}と呼ばれるもので、まさに字のごとく馬を留めておくために付けた金具です。鉄道などの輸送が進む以前は、信州へ運ぶ物は、市内扶桑町や九久平町までは、川船で、それから先は馬の背に載せられて運ばれていまし



写真 田口家住宅と駒繋ぎ

た。田口家についている駒留めは、信州へと物を運ぶ途中に足助に立ち寄った人が、馬を繋いだのだでしょう。

この他にも馬に纏^{まと}わるものが見られます。街道沿いの町並みの入り口に、貴重な馬を奉る馬頭観音があり、その横に牛や馬が水を飲むための「牛馬摂待水」と彫られた石造水槽があります。また、豊田市足助中馬館（愛知県指定有形文化財）では、馬に乗せていた鞍などの道具を見学することができます。馬の背に荷を載せ運んでいた歴史の一端を垣間見ながら、足助の町並みを歩いてみてはいかがでしょうか。（松川 智一）

平成25年度博物館実習について

「学芸員」の資格取得には、博物館における館務実習が必修となっています。

豊田市郷土資料館では、今年度も8月28日（水）～9月3日（火）、国家資格である「学芸員」の資格取得をめざして勉強している豊田市在住・在学・出身者等の大学生を、館務実習生として受け入れました。

今年度の実習生は6名。豊田市教育委員会文化財課所管の豊田市郷土資料館と豊田市民芸館で、実務体験を盛り込んだ実習を行いました。

実習生たちは、豊田市の博物館の種類や現状についての講義から始まり、考古・民俗・古典籍・古文書・歴史的美術工芸品の取扱いや写真撮影に関する実習や、模擬展示を体験しました。

公立の博物館の運営がどのようなものか、その中で働く学芸員がどのような視点で「博物館資料」や「文化財」の活用・公開、保管・管理、そして調査・研究をしているか。実習生の皆さんが何を見て、何を感じ

<主な博物館実習の内容>

- 館長あいさつ・オリエンテーション
- 豊田市の博物館の種類と現状
- 資料の取り扱い実習・資料台帳の作成
- 写真撮影の実習
- 考古学資料の取り扱い等に関して
- 民具資料の整理
- 民芸館における実習
- 「展示とは？」模擬展示実習・発表・講評 など

て下さったかは一人ひとり違うと思いますが、この実習を通して、豊田市の郷土の歴史や文化財を伝え、保存していく仕事について考え、学芸員の仕事の一端を体感する機会となったのであれば幸いです。

実習生の皆様のご活躍を期待しております。

文化財シリーズ

86

市指定文化財 千手観音立像

千の手とそれぞれの掌に眼をもち、衆生の苦しみを救うという観音菩薩です。観音菩薩は、衆生に悟りの法を説く如来に対し、衆生に現世利益の救済を施す存在で、日本では奈良時代からこの信仰が盛んになります。

実際に千の手をもつ観音像もありますが、中央の2手のほかに40の手を加えた42手で造られることが一般的です。一本の手で25の世界の衆生を救うので（ $40 \times 25 = 1000$ ）＝千手となり、その手には様々な法力や徳を示す持物をもっています。本像もこの様式で造られており、面相や下腹部の出る作風から、

今回ご紹介する文化財は、猿投神社観音堂に安置されている木造千手観音立像です。正しくは十一面千手千眼観自在菩薩といい、頂上に十一面をいただくほか、

平安時代中期の作と推定され、もとは彩色された像であったと考えられています。また、台座、脇手の持物および宝冠は後補になります。

現在は猿投神社の鬼門（北東）に位置する観音堂に安置されていますが、もともとは同社の神宮寺である白鳳寺のものであったと伝えられています。



資料館NEWS

史跡めぐり

「稲武の史跡・文化財・天然記念物探訪」開催

去る10月9日（水）、豊田市稲武地区の文化財を巡る見学ツアーを開催しました。今回のツアーでは「稲武郷土資料館」を始め、「押川の大滝」「武節城址」「大野瀬神社のイチョウ」「大野瀬の子持ちカツラ」「古橋懐古館」を巡りました。

ツアーのスタートとして稲武郷土資料館を訪れ、三河山間地域に住む人々の生活用具を中心とした民俗、歴史、自然の展示資料を見学していただきました。

続いて大滝では滝つぼに向かってダイナミックに流れ落ちる様を滝の上から見ていただき、武節城址では武田や徳川などの戦国武将が関った地に思いを馳せていただきました。

午後からは、豊田市自然愛護協会理事であり豊田市

文化財保護審議会委員の山田弘先生^{やまだひろむ}を講師に迎え、大野瀬のイチョウとカツラを回りました。山田先生には山に生える草花のことも交えて、イチョウとカツラの奥深い生態について語っていただきました。

ツアーの最後には古橋懐古館を訪れ、古橋家が収集してきた幕末・明治維新に活躍した偉人の文書を始めとするコレクションを見学していただきました。

途中雨が降るというあいにくの天気ではありましたが、初めて訪れる・知らなかったという方も多く、「稲武地区の文化財を知る良い機会になった。」と大変喜んでいただきました。



大野瀬の子持ちカツラ

利用案内

開館時間 9:00～17:00
休館日 毎週月曜日（祝祭日は開館）
入場料 無料（特別展開催中は有料）
交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分
名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分
愛知環状線「新豊田駅」より 徒歩15分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ徒歩5分
駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.86■

平成25年12月25日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: <http://www.toyota-rekihaku.com>

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。